

④肝内の activity の分布状態がより把握できた。

⑤肝自体を見る目的の場合は, sulfer colloid よりも phytateの方が優れた肝シンチグラムが得られることになり, 十分臨床的に応用できると思われた。

#### 10. $^{99m}\text{Tc}$ -pyrophosphateによる, 骨シンチの実験的, 臨床的研究

○森田 一徳 渡辺 克司 川平建次郎  
鴨井 逸馬 松浦 啓一  
(九大・放)

$^{99m}\text{Tc}$ -pyrophosphate の骨シンチグラフィ用 RI としての有用性について実験的, 臨床的に検討した。ラットの一侧下腿部に人為的に骨折を作り骨折部と正常骨及び他の臓器における分布を経時的に観察したが, 他臓器にくらべ骨には高い分布が見られた。又骨折部と正常骨との分布を比較すると約2倍骨折部に高く分布していた。又骨折の臨床例についてデータ処理装置を用いて骨折部と正常部の特定断面での濃度分布を比較したら約4倍骨折部が高かった。以上骨折を使った動物実験及び臨床例の検討で  $^{99m}\text{Tc}$ -pyrophosphate が骨シンチ用 RI として優れていることが認められた。

#### 11. 電解法により作成された $^{99m}\text{Tc}$ -標識化合物の臨床的評価

○渡辺 克司 川平建次郎 鴨井 逸馬  
森田 一徳 松浦 啓一  
(九大・放)

電解法により調剤した  $^{99m}\text{Tc}$ -スズコロイド,  $^{99m}\text{Tc}$ -ピロリン酸,  $^{99m}\text{Tc}$ -EDTA および  $^{99m}\text{Tc}$ -アルブミンを用いてシンチグラフィを行い, その臨床的評価を試みた。肝シンチグラフィを行ったもの151例, 骨シンチグラフィを行ったもの23例, 腎シンチグラフィを行ったもの34例, RI アンギオグラフィを行ったもの20例の計228

例を調査の対象とした。得られたシンチグラムを A, B, C, D の4段階にわけて評価した。Dと評価される目的臓器への集積を認めない例は1例もなかったが, 比較的, 像の鮮明さを欠く B, C と評価された例が多かった。像質については若干劣る面もあり, 今後とも研究が必要と思われる。しかし, いずれの  $^{99m}\text{Tc}$ -標識化合物も極めて簡単に調剤することができるので, 日常使用の上では極めて便利である。228例の全例において副作用は全く認められなかった。

#### 12. 門脈循環異常症例における $^{131}\text{I}$ -MAA 門脈灌流スキャンニングの経験について

中川 昌壮  
(熊本・三内)

巨大な脾腫を有し, 諸種の門脈循環異常が疑われる患者の血行動態のより正確な把握が診断ならびに治療の上に大事なことであるので, その1法として, 1965年東大上田らにより開発された  $^{131}\text{I}$ -MAA 脾内注入による門脈灌流スキャンニング法をとりあげ, 12症例に施行した。肝硬変症(4例)では一般に hump が認められるが, その高さは低くすぐに back ground の level にもどり, 肝像はほとんど認められないが, 肺像は明らかであった。短絡指数は80~90%で高かった。Idiopathic portal hypertension (1例)では, きわめて高い hump のあと back ground より有意に高い level の plateau におちつき, 肺, 肝ともに image が明瞭であった。Banti's syndrome (3例)では hump がなく, 肝像は明らかであったが, 肺像の程度はまちまちであり, 短絡指数も40%位であった。その他の hemolytic anemia, thrombocytopenia および malign. lymphoma (各1例)では hump は認めなかった。本法は肝内外シャントの有無およびその定量的指標が得られ, 臨床的に有意義であると判断された。